

## 動物医療からわかる人の医療

鈴木信孝<sup>1)</sup>、安川明夫<sup>2)</sup>

- 1) 日本補完代替医療学会理事長、日本補完代替医療学会理事長、（一社）比較統合医療学会理事、  
金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 臨床研究開発補完代替医療学講座 特任教授  
2) 比較統合医療学会理事長、（一社）比較統合医療学会代表理事、日本補完代替医療学会理事、  
西荻動物病院、上石神井動物病院、（一社）林屋生命科学研究所

医師と獣医師は、科学的知識を持ち、専門的訓練を受け、法に定められた義務を遂行するとともに、人と動物の健康と環境の維持に係る幅広い活動分野において業務に携わる機会と責任を有していると言えます。2012年10月、世界獣医師会と世界医師会は、“Global Health”向上のため、また、人と動物の共通感染症への対応、責任ある抗菌剤の使用、教育、臨床及び公衆衛生に係る協力体制を強化するため、両社が連携し、一体となって取り組むことを合意し、覚書を取り交わしています。また、日本医師会と日本獣医師会は、2013年11月に健康で安全な社会を構築するため、医療及び獣医療の発展に関する学術情報を共有し、連携・共同することに同意し、協定書を取り交わしました。さらに、日本医師会と日本獣医師会は、感染症、自然災害などの危機に対し備えることは勿論、医師と獣医師との連携の強化がいかに大切であるかという点についても意見の一致を見ています。この協定書締結は、すでに日本全国大多数の地域医師会と地方獣医師会においても達成されています。

さらに、2016年11月、世界獣医師会、世界医師会、日本医師会、日本獣医師会の4者は、2015年、スペインのマドリードで開催された第1回“One Health”に関する国際会議に続いて、第2回目の国際会議を日本（福岡県北九州市）で開催しました。医師と獣医師は、世界31か国から福岡の地に集い、人と動物の共通感染症、薬剤耐性対策（厚生労働省担当）等を含む“One Health”に関する重要な課題について情報交換と有効な対策の検討を行い、評価すべき成果を収めました。本会議では、“One Health”の概念を検証し、認識する段階から、“One Health”

の概念に基づき行動し、実践する段階に進むことを決意し、以下のとおりの「福岡宣言」を行っています。

1. 医師と獣医師は、人と動物の共通感染症予防のための情報交換を促進し、協力関係を強化すると共に、その研究体制の整備に向け、一層の連携・協力を図る。
2. 医師と獣医師は、人と動物の医療において重要な抗菌剤の責任ある使用のため、協力関係を強化する。
3. 医師と獣医師は、“One Health”の概念の理解と実践を含む医学教育および獣医学教育の改善・整備を図る活動を支援する。
4. 医師と獣医師は、健康で安全な社会の構築に係る全ての課題解決のために両者の交流を促進し、協力関係を強化する。

ウエストナイル熱、重症急性呼吸器症候群(SARS)、鳥インフルエンザ、豚インフルエンザといった動物由来感染症が世界の各地域で発生し、尊い生命が数多く失われているのは事実であります。一方、近年、わが国固有の地方病もいくつか問題となっており、とくに日本住血吸虫症などの人畜共通感染症については注意が必要となっています。日本住血吸虫症は、馬や犬をはじめ数多くの動物が宿主となることが知られており、本疾患の調査研究に比較統合医療学会が果たした役割については会員諸氏にとっては周知の事実でしょう。

伴侶動物の種類も多様化し、改めて動物由来感染症が問題となる中、大切なことは人と動物の共通の感染症について正しく理解し、その予防を図ることです。そもそも上記の医師と獣医師の連携は、これ



ら感染症対策を契機にしたものでした。しかし、連携は今後、より広範囲な疾患の研究や治療に渡るべきでしょう。このことについては著書「人間と動物の病気を一緒にみる」【写真】に詳しいのでぜひご一読願いたいと思います。著者は、汎動物学（ズービキティー：Zoobiquity）という概念を詳細に説明

し、医師が動物界から学ぶべきことがいかに多いかを述べています。また逆に、獣医師も人間界から学ぶべきことが多いのも事実だと思います。

日本補完代替医療学会と比較統合医療学会は、ともに補完代替医療や統合医療のスペシャリストを有する学会として、わが国では当該分野のリーダー的存在であり、両者の連携は今後大きな医学的成果をもたらすと予想されます。したがって、本同学術集会の意義は大きいと言えるでしょう。

今回のシンポジウムでは、人畜感染症として日本住血吸虫症をとりあげ、また、ヒトと犬の比較腫瘍学の1例として、ヒトの癌化学予防食品（ハトムギCRD エキス）の開発において、医師と獣医師の連携がいかに重要であったかを例示し（ヒト扁平上皮領域の前癌病変・早期癌と犬ウイルス性色素性局面）、会場の医師や獣医師と共に活発な討論を行う予定です。さらに、両学会の今後の協力体制についても議論する予定ですので、多くの会員のご参加をお待ちしています。